



# 第825回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.825 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

## 2017年2月26日(日) 14:00開演

Sun. 26 February 2017, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● ダニエーレ・ルスティオーニ Daniele RUSTIONI, Conductor  
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

Concert Programs

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

### デュカス：交響詩《魔法使いの弟子》(13分)

Dukas: L'apprenti sorcier

### レスピーギ：交響詩《ローマの噴水》(17分)

Respighi: Fontane di Roma

- |   |               |
|---|---------------|
| I La fontana di Valle Giulia all'alba     | 夜明けのジュリアの谷の噴水 |
| II La fontana del Tritone al mattino      | 朝のトリトーネの噴水    |
| III La fontana di Trevi al meriggio       | 昼のトレヴィの噴水     |
| IV La fontana di Villa Medici al tramonto | 黄昏のメディチ荘の噴水   |

休憩 / Intermission (20分)

### ベルリオーズ：幻想交響曲 op.14 (52分)

Berlioz: Symphonie Fantastique, op.14

- |   |                   |
|---|-------------------|
| I Rêveries; Passions<br>(Largo - Allegro agitato e appassionato assai)  | 夢、情熱              |
| II Un bal<br>(Valse, Allegro non troppo)                                | 舞踏会               |
| III Scène aux champs<br>(Adagio)  | 野の風景              |
| IV Marche au supplice<br>(Allegretto non troppo)                        | 断頭台への行進           |
| V Songe d'une nuit du Sabbat - Ronde du Sabbat<br>(Larghetto - Allegro) | 魔女の夜会の夢～魔女の Rondò |

曲目解説(本文P.14～17をご覧ください。)  
演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業)



ヤングシート対象公演(青少年を年間500名ご招待)

募集はP.27を、協賛企業・団体はP.57をご覧ください。



お願いー演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないように  
ご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。  
音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。



# 第825回 定期演奏会Cシリーズ

Series

Subscription Concert No.825 C Series

相場 ひろ AIBA Hiro

Concert Programs

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

Topics

from TMSO

## デュカス：交響詩 《魔法使いの弟子》

フランス近代を代表する作曲家のひとりポール・デュカス(1865～1935)は1892年、コルネイユの悲劇に基づく序曲《ポリュクト》が初演され注目を浴びた。以後、歌劇『アリアーヌと青ひげ』(1907年)をはじめとする数々の傑作によって名声を確立するものの、1912年に舞踏詩《ラ・ペリ》を初演して後は健康を害してほとんど筆を執ることができず、また自ら破棄した作品も多かったため、生涯にわずか13曲を発表したのみで、69歳で世を去った。

交響詩《魔法使いの弟子》は彼の初期を代表する作品で、1897年に初演された。明快な物語性を持ちつつも、音楽の構成原理が保たれた自立的な交響詩を理想としたデュカスは、作品のプログラムにヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(1749～1832)の物語詩『魔法使いの弟子』を選び、楽譜に「ゲーテによる交響的スケルツォ」の副題を付した。

水あるいは魔法使いをあらゆる<sup>せいひつ</sup>静謐な序奏に始まり、師の留守中に未熟な弟子が魔法をかけた<sup>ほうき</sup>帚に水汲みをさせたものの、動きを止める呪文を忘れたために館中が水に呑み込まれてしまい、結局は帰宅した師が帚を止めて事態を收拾する、という物語を、デュカスは自由なロンド・ソナタ形式に乗せて繰り広げている。

作曲年代：1896～97年

初演：1897年5月18日 バリ 作曲者指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ、弦楽5部

## レスピーギ：交響詩 《ローマの噴水》

オットリーノ・レスピーギ(1879～1936)は、歌劇一辺倒であった当時のイタリア音楽界にあって管弦楽曲の作曲に力を入れ、ロシアやドイツ、フランスなど諸外国の音楽から様々な影響を受けると同時に、イタリアの音楽遺産を研究して、近代イタリア音楽のあり方を模

索した。

その成果のひとつが、「ローマ3部作」と呼ばれる3つの交響詩《ローマの噴水》《ローマの松》《ローマの祭》である。巧みな管弦楽法が生み出す鮮烈な色彩と共に、旧跡をめぐるつつ古代からルネサンスに至るローマの栄光を振り返るこれらの作品は、レスピーギの代表作として広く親しまれている。

3部作の第1作である《ローマの噴水》は、ローマにある4つの有名な噴水を採り上げ、それぞれを夜明けから夕方までの時間の移り変わりの中に位置づけて描写する(全曲は続けて演奏される)。なお原題にあるfontanaは「泉」とも「噴水」とも訳されるが、厳密には自然の湧き水でも観賞用の施設でもなく、人工的に整備された水飲み場を意味する。

**第1部「夜明けのジュリアの谷の噴水」** 曖昧模糊とした雰囲気の中からオーボエの独奏が聞こえ、冷たく湿った霧の中、牛の群れが通り過ぎていく様子を描く。やがて夜は白々と明けていく。

**第2部「朝のトリトーネの噴水」** 力強いホルンのファンファーレと共に開始し、水の精ナイアーデたちや半人半魚の神トリトーネがやって来て、水しぶきの中で踊り出す。

**第3部「昼のトレヴィの噴水」** 活気あふれる第2部がいったん沈静すると、壮麗な旋律が歌い出される。金管の輝かしいファンファーレと共に、海の神ネットゥーノ(ネプチューン)を先頭とする行列が通り過ぎていくさまが描かれる。

**第4部「黄昏のメディチ荘の噴水」** 海の神の行列が過ぎ去ると、静かでもの悲しげな雰囲気が空間を満たす。ルネサンス時代に栄華を極めたメディチ家の屋敷の庭園である。鐘の音が遠くから聞こえ、木管楽器の模倣する鳥たちの鳴き声も響きわたる。すべては闇の中へと消え去っていく。

作曲年代：1916年

初演：1917年3月11日 ローマ アントニオ・ガラルニエリ指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、チャイム、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、オルガン、弦楽5部

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

## ベルリオーズ：幻想交響曲 op.14

1827年9月、イギリスのシェイクスピア劇団がパリのオデオン座に來演し、いくつかの劇を上演した。若き日のエクトール・ベルリオーズ(1803～69)はそこで『ハムレット』を観て、その豊かな想像力と劇的な力の虜となると同時に、オフィーリア役を務めたアイルランド出身の女優ハリエット・スミスソン(1800～54)にすっかり心を奪われた。彼はスミスソンに手紙を出したり、面会を取り付けようと画策したりもしたものの、この恋は一方的な失恋に終わる。その失意の記憶をもとに生まれたのが《幻想交響曲》である。

《幻想交響曲》は、全楽章を通じて登場する「固定楽想(イデー・フィクス)」と呼ばれる旋律が全5楽章を結びつけることで、ベートーヴェン並みに拡大された交響曲形式に強い一貫性を与えられている。同時に、作曲者自身がプログラムを公表して、固定楽想を恋する女性になぞらえ、楽曲全体を、その恋と夢の成り行きを語るストーリーに沿って進行する標題音楽としている。絶対音楽的な美学と標題性の融合というこの手法によって、ベルリオーズは音楽史上に大きな足跡を遺すことになった。

**第1楽章「夢、情熱」** ベルリオーズ自身の手になるプログラムには、「ある若い音楽家が情熱にかられ、あらゆる魅力を備えた1人の女性に恋をした。情熱から来る錯乱はアヘンの力を借りて彼を支配する」とある(以下「」内は作曲者のプログラムによる)。

おおよそソナタ形式をとる。長大な序奏に続いて登場する主題(フルートと第1ヴァイオリン)が恋人をあらわす固定楽想である。第2主題として木管楽器に短い旋律があらわれるが、ここでは固定楽想の存在感が強く、ほとんど単一主題構成に近い。展開部では劇的なエピソードと優美なエピソードが交互にあらわれ、固定楽想に基づく輝かしいクライマックスと共に短い再現部を迎え、静と動を厳しく対置したコーダによって終結する。

**第2楽章「舞踏会」** 「皆がワルツを踊る喧騒の中、想い人があらわれる」

優美なワルツ。中間部ではそのリズムに乗って固定楽想が登場する。

**第3楽章「野の風景」** 「ある田舎の夕べ、2人の牧人が歌い交わしている。主人公の心に束の間の安らぎと希望が訪れるものの、やがて不安にかられる。再び牧人の歌が聞こえるが、もはや応える者は

いない。遠くに雷鳴が聞こえる。孤独と沈黙」

イングリッシュホルンと“舞台裏で”と指定されたオーボエが、牧人たちの歌い交わすさまを描く序奏の後、第1ヴァイオリンとフルートによって抒情的な主題が歌われる。中間部では激しい弦の動きが固定楽想を導き出す。主部が回帰しても固定楽想は姿を消さない。最後に冒頭の情景へと立ち返るものの、もはやイングリッシュホルンの呼びかけに応える者はいない。4台のティンパニが遠くの雷鳴を模倣し、不安をかき立てつつ消えるように終わる。

**第4楽章「断頭台への行進」** 「主人公は幻影を見る。想い人を殺してしまった自分が処刑される幻影である。ときに暗く荒々しく、ときに華やかで壮麗な行進曲に乗って、彼は断頭台へと連れていかれる」

自身の未完の歌劇『宗教裁判官』のために書かれた行進曲に基づく。トランペットやホルネットによる輝かしい行進曲の旋律に対し、グロテスクなトロンボーンのペダル・トーンを配置するなど、管弦楽の特異な色彩が絶妙な効果を挙げる楽章である。コーダではクラリネットによって固定楽想が回想された後、ギロチンの一撃と、それに続く群衆の歓声を模倣して曲が閉じられる。

**第5楽章「魔女の夜会の夢～魔女の rondò」** 「死んだ主人公は、自分の葬礼に集まった魔女や物の怪たちの宴を見る。奇怪なざわめきに交じって想い人もあらわれるが、その姿はもはや醜く変容してしまっている。彼女を迎える声上がる。やがて甲鐘とグレゴリオ聖歌《怒りの日》が鳴りわたり、魔女たちの宴の踊りに入り交じる」

ゲーテの戯曲『ファウスト』に想を得たフィナーレでは、魔女たちのざわめきを模倣する序奏の後、クラリネットが大きく変容した固定楽想を諧謔味<sup>かいぎやくみ</sup>を込めて歌い出す。以後、力強い rondò 主題と、チューバなど低音楽器に登場するグレゴリオ聖歌《怒りの日》（死者のためのミサにおいて用いられる典礼歌の一部）とが絡み合いながら、狂騒的なクライマックスが描き出される。

作曲年代：1830年1～4月(1831、51年改訂)

初演：1830年12月5日 バリ フランソワ＝アントワヌ・アブネック指揮

楽器編成：フルート2(第2はピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2(第2は小クラリネット持替)、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、鐘、ハーブ2、弦楽5部、舞台裏にオーボエ

# 都響・八王子シリーズ ロシア&チェコのノスタルジア—郷愁を誘う音楽

Hachioji Series

オリンパスホール八王子

2017年3月5日(日) 14:00開演

Sun. 5 March 2017, 14:00 at Olympus Hall Hachioji

指揮 ● 井上道義 INOUE Michiyoshi, Conductor

ピアノ ● 横山幸雄 YOKOYAMA Yukio, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

## ボロディン：交響詩《中央アジアの草原にて》(7分)

Borodin: In the Steppes of Central Asia

## ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 op.18 (32分)

Rachmaninov: Piano Concerto No.2 in C minor, op.18

- I Moderato
- II Adagio sostenuto
- III Allegro scherzando

休憩 / Intermission (20分)

## ドヴォルザーク：交響曲第8番 ト長調 op.88 B.163 (37分)

Dvořák: Symphony No.8 in G major, op.88 B.163

- I Allegro con brio
- II Adagio
- III Allegretto grazioso
- IV Allegro ma non troppo

曲目解説(本文P.18~21をご覧ください。)

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

お願い—演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。  
音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

# 都響・八王子シリーズ

TMSO

ロシア&チェコのノスタルジア—郷愁を誘う音楽

Hachioji Series

寺西 基之 TERANISHI Motoyuki

## 【ボロディン：交響詩《中央アジアの草原にて》

ロシアの国民的な芸術音楽の創造をめざした作曲家グループ「力強い仲間たち(ロシア五人組)」の一員だったアレクサンドル・ボロディン(1833～87)はアジアの血を引いており、作品にもしばしばオリエンタリズムが打ち出されている。

1880年に皇帝アレクサンドル2世(1818～81)の即位25周年祝賀行事のために書かれた《中央アジアの草原にて》(原題は「中央アジアにて」)もそうした特色を持つ作品である。記された標題によれば、「果てしない草原でロシアの歌と東洋の歌が馬や駱駝(らくだ)の足音とともに聞こえてきて、ロシア兵に護衛されて平和に旅するアジアの隊商の一行が通り、ロシアとアジアの歌が一つに溶け込んで次第に遠くの空に消えゆく」といった光景が描かれている。

冒頭、クラリネットに出るロシアの歌の主題と、それに続くイングリッシュホルンの東洋風の主題が組み合わされつつ、美しい発展が織り成される名品である。

作曲年代：1880年

初演：1880年4月8日(ロシア旧暦)(西暦4月20日)  
サンクトペテルブルク リムスキー＝コルサコフ指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

## 【ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 八短調 op.18

チャイコフスキー(1840～93)に連なるロシア・ロマン派の流れを引くセルгей・ラフマニノフ(1873～1943)は、当代きってのピアノの名手だったこともあり、優れたピアノ作品を数多く残している。そうした彼の作品の中でとりわけポピュラーなのがピアノ協奏曲第2番で、ロシア的な民族感情とピアノスティックな名技性が結び付いた彼らしい傑作として親しまれていることは今さら言うまでもないだろう。

彼は1899年にピアニストとしてロンドンを訪れ、成功を収めた。実はこの時、ラフマニノフを招聘した当地のフィルハーモニック協会が彼が新作の協奏曲を弾くことを要望していた。しかしこの時期、ラ

フマニノフは作曲の面では相当のスランプに陥っており、結局ソロ作品だけが演奏されたのだった。

スランプの原因は1895年に作曲した第1交響曲の初演(1897年)の失敗にあった。彼は長引くスランプから脱すべく、1900年の1月から4月まで精神科医ニコライ・ダーリ(1860～1939)の催眠療法を受ける。この治療のおかげでラフマニノフは立ち直り、夏にはピアノ協奏曲の作曲に本格的に着手、同年中に第2、第3楽章が書かれ(この2つの楽章は同年12月に私的初演された)、第1楽章は翌年完成された。全曲初演はモスクワで彼自身のピアノで行われて大成功を収めている。

**第1楽章 モデラート ハ短調** ロシアの鐘を想起させる独奏ピアノだけの重々しい和音で始まる。続いてヴァイオリンとヴィオラとクラリネットのユニゾンで現れる重く暗い情熱的な第1主題は、跳躍のないならかな旋律線が特徴で、ピアノがアルペッジョでこれを彩る。それに対して叙情的な第2主題はピアノが主役となる。展開部はピアノと管弦楽が拮抗しつつ激しいうねりを作り出し、再現部冒頭では朗々と第1主題を奏する管弦楽に対し、ピアノは展開部に出た新しい動機を強奏して、圧倒的な頂点を築く。

**第2楽章 アダージョ・ソステヌート ホ長調** ラフマニノフ特有の甘く官能的な叙情の支配する緩徐楽章。弱音器付きの弦による神秘的な序奏を受けてピアノがノクターン風に弾き始め、その上にフルートが主題を吹き、クラリネットが受け継ぐ。中間部は一転、落ち着きなく気分が揺れ動いて感情が昂ぶり、テンポも速まっていく。

**第3楽章 アレグロ・スケルツァンド ハ短調** ロンド・ソナタ風のフィナーレで、軽快な管弦楽にピアノの技巧的なパッセージが続く序奏に始まり、やがてピアノが力強い第1主題を奏する。第2主題は管弦楽が息長く表情豊かに歌い(その後半には第1楽章第2主題が組み込まれる)、ピアノに受け継がれる。この2つの主題が交互に現れ、ピアノと管弦楽との丁々発止のやりとりの中で、第1主題による緊迫したフガートをはじめ様々な展開が織り成され、大きく高揚していく。

作曲年代：1900～01年

初演：1901年10月27日(ロシア旧暦)(西暦11月9日) モスクワ  
作曲者独奏 アレクサンドル・シロティ指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、  
トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、  
シンバル、弦楽5部、独奏ピアノ



2  
/ 263  
/ 53  
/ 93  
/ 183  
/ 193  
/ 213  
/ 26

## ドヴォルザーク：交響曲第8番 ト長調 op.88 B.163

1884年、すでに国際的に高い名声を得ていたアントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)は、プラハの南西に位置するヴィソカー村に別荘を建て、翌年から、冬のシーズンを除いて1年の多くをここで過ごすようになる。ヴィソカー村の生活はドヴォルザークに精神的な落ち着きを与え、充実した生活の中で彼は円熟期の名作を生み出していく。

特に1889年はピアノ曲《詩的な音画》、ピアノ四重奏曲第2番、本日の交響曲第8番など、重要な作品が書かれている。彼自身、ピアノ四重奏曲を作曲中に友人に宛てた手紙で「溢れ出る楽想を書き留めていくのに手が追いつかない」と述べていることから、この時期の彼の靈感の高まりが窺い知れる。

交響曲第8番は、このピアノ四重奏曲完成直後の8月26日に着手され、わずか1カ月足らずで全曲のスケッチを完了、ただちにオーケストレーションに着手して、11月8日に全曲が完成された。まさに靈感に衝き動かされるように作曲された交響曲といえよう。

この交響曲に見られる創造力の高まりは、筆の速さだけでなく、ほとばしり出るようなボヘミア的な数々の楽想や、音楽の流れの勢いを感じさせるラプソディックな構成にも現れている。といっても決して勢い任せに書かれているわけではない。彼自身、この交響曲をこれまでにない「新しい手法」で作曲したと述べているとおり、この作品で彼は意識して独創的なスタイルと書法を試み、伝統的な交響曲の論理的な作法から離れて、湧き上がる楽想とラプソディックな展開を生かすような、民族的な交響曲に相応しい独自の論理的手法を追求しているのだ。一方で靈感の発露と、他方でそれをまとめる新しい書法の開拓とが結び付いてきわめてボヘミア色豊かな作品を生み出した点に、この時期のドヴォルザークの充実ぶりが示されている。

この作品の独自性の例として第1楽章第1主題を挙げよう。多様な楽想が次々現れるこの第1楽章の中でも最も主要な素材となるのが冒頭の2つの楽想、すなわちチェロ、クラリネット、ファゴット、ホルンのユニゾンによる哀愁を帯びたト短調の楽想と、それにすぐ引き続いてフルートが示す鳥の歌のような明るいた長調の楽想である。第1主題部はこの2つの全く異なる楽想によって形成されており、同調の短調・長調の対比と楽想の変化を結び付けて気分の変化を生み出すこうした主題の構成法に、伝統的な主題作法とは違う独創的な発想が示されている。かかる長短三和音の自由な交替による気分

の変転はスラヴの民俗音楽に通じるもので、民族性の表現を交響曲の様式のうちに盛り込もうとする綿密な意図がこの第1主題にはっきり窺える。

初演は1890年2月2日ブラハでドヴォルザーク自身の指揮で行われて大成功を収めた。4月24日のロンドン初演もやはり彼の指揮でなされて大喝采を浴びている。

**第1楽章 アレグロ・コン・プリオ** ト長調 先述のように対照的な2つの楽想を持つ第1主題に始まる。第2主題は口短調で現れる軽快なもの。展開部は冒頭に戻ったかのように第1主題の2つの楽想で始まるが、やがて劇的盛り上がり築き、その頂点で第1主題第1楽想がトランペットに激しく主調で現れて再現部に突入、続けて第1主題第2楽想をイングリッシュホルンがのどかに吹いてその嵐を静める。全体に様々な楽想に富んだ活力に溢れる楽章だ。

**第2楽章 アダージョ** ハ短調 同じ年に先に書かれたピアノ曲集《詩的な音画》の中の「古城で」との関連が指摘されている緩徐楽章。静かな自然の中で孤独に瞑想するような主部に始まる。フルートの鳥の声も寂しい気分を際立たせるかのようなようだ。ハ長調となる中間部は一転楽しい足取りとなって、村のヴァイオリン弾きの描写を挟みながら、光燦々と照るような輝かしい高揚を見せる。やがて主部が戻るが、単なる回帰でなく、展開的な発展のうちに不安な気分を強め、緊迫感に満ちた盛り上がり形成、その後中間部が回想され、コーダに至る。

**第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ** ト短調 いかにもポヘミア的な伸びやかさを持つ舞曲風の楽章。ト長調の牧歌的な中間部は、自作のオペラ『頑固者』（1874年）の中の旋律による。

**第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo** ト長調 変奏形式にロンド・ソナタの要素を結び付けた独自の形式のフィナーレ。トランペットのファンファーレの後、のどかな主題がチェロに現れ、以後この主題の変奏を中心に、エピソードや展開的部分、ファンファーレの再帰などを取り交ぜつつ自由な発展を繰り返す。後半は緩やかなテンポとなって気分を和らげた後、第2変奏の回帰が再び曲を活気づけ、華やかなコーダを導く。

作曲年代：1889年

初演：1890年2月2日 ブラハ 作曲家指揮

楽器編成：フルート2(第2はピッコロ持替)、オーボエ2(第2はイングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部



# 第826回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.826 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2017年3月9日(木) 14:00開演

Thu. 9 March 2017, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● 飯守泰次郎 IIMORI Taijiro, Conductor

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

## ベートーヴェン：序曲『レオノーレ』第3番 op.72b (14分)

Beethoven: Overture to "Leonore" No.3, op.72b

## ベートーヴェン：交響曲第8番 へ長調 op.93 (26分)

Beethoven: Symphony No.8 in F major, op.93

- I Allegro vivace e con brio
- II Allegretto scherzando
- III Tempo di Menuetto
- IV Allegro vivace

休憩 / Intermission (20分)

## ワーグナー：歌劇『さまよえるオランダ人』序曲 (11分)

Wagner: Overture to "Der fliegende Holländer"

## ワーグナー：歌劇『ローエングリン』第1幕への前奏曲 (8分)

Wagner: Prelude to Act 1 from "Lohengrin"

## ワーグナー：楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』 第1幕への前奏曲 (10分)

Wagner: Prelude to Act 1 from "Die Meistersinger von Nürnberg"

曲目解説(本文P.22~26をご覧ください。)

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

(舞台芸術創造活動活性化事業)



文化庁

お願いー演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。  
音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。



# 第826回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.826 C Series

広瀬 大介 HIROSE Daisuke

## ベートーヴェン：序曲『レオノーレ』第3番 op.72b

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が唯一残したオペラ『フィデリオ』を巡る上演事情はかなり複雑である。作曲開始は1803年(当初のタイトルは『レオノーレ』)。その改訂と序曲の関係は錯綜しているため、以下年表風にまとめた。

1805年11月20日 アン・デア・ウィーン劇場

『レオノーレ』第1稿初演。序曲『レオノーレ』第2番(上演に使用された序曲/以下同)。

1806年3月29日 アン・デア・ウィーン劇場

『レオノーレ』第2稿初演。3幕から2幕に改作。序曲『レオノーレ』第3番(本日演奏)。

1807年

プラハでの上演用に序曲を作曲(上演は実現せず)。序曲『レオノーレ』第1番(旧説ではこの曲の成立がもっとも早いとされたため、「第1番」の番号が与えられた)。

1814年5月23日 ケルトナートア劇場

『フィデリオ』と改名された第3稿を初演。序曲の作曲が間に合わず、『アテネの廃墟』序曲を使用。5月26日の第2回公演で『フィデリオ』序曲が初めて演奏される。

革命の強権支配から脱出する英雄物語は、当時の世相をもっとも良くあらず題材であり、政敵ドン・ピツァロによって獄中にとらえられた英雄フロレスタンを救い出す妻レオノーレの可憐かつ芯の強い人物描写は、多くの人の胸を打った。絶対王政にも、フランス革命にも、そしてナポレオンの帝政にも絶望した1810年代のベートーヴェンは、本当の意味で目指したユートピア的な共和制の世界観を、自作のさらなる改訂を通じて反映させようとした。

最終的な勝利を感じさせる(交響曲第5番フィナーレと同じ)ハ長調を用い、ソナタ形式の中に、劇の内容を暗示するような闘争をあらずモチーフと、フロレスタンが登場する第2幕のアリアの旋律が組み込まれる。劇の内容を暗示する旋律で序曲を構成する方法は、すでにモーツァルトが『ドン・ジョヴァンニ』や『コシ・ファン・トゥッテ』序曲冒頭で試しており、ベートーヴェンはそれをもう一歩推し進めたことになる(最終的に確定した『フィデリオ』序曲では、劇中のモ

ティーフは用いられていないが)。数多くの『レオノーレ』『フィデリオ』序曲の中で、このもっともドラマティックな第3番は、後期のベートーヴェン作品を暗示する力強さを示している。

作曲年代：1805～1806年

初演：1806年3月29日 ウィーン アン・デア・ウィーン劇場  
イグナツ・ザイフリート指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、  
トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、舞台裏に  
トランペット

## ベートーヴェン：交響曲第8番 へ長調 op.93

1809年から13年にかけては、ヨーロッパはまさに激動の時代。フランス軍のウィーン占領およびロシア遠征の敗北があり、ベートーヴェンの周囲でも恩師ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)の死、テレゼ・マルファッティ(1792～1851)やアントーニエ・ブレンターノ(1780～1869)との真剣な交際と破局などが続いたが、この時期の作品群には、生の喜びを感じさせるような明るい雰囲気曲が多く、この交響曲も例外ではない。

第8番はつい最近までベートーヴェンの「小交響曲」と呼ばれることが多かった。前後の交響曲に比べると確かに楽曲としての規模は小さいが、「小」というのはむしろ、くつろいだ雰囲気を多分に有し、室内乐的にオーケストラの各楽器が絡み合う、その音楽の性格に起因するものだろう。

**第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・プリオ** 何の前置きもなく、突然第1主題の全奏が始まる。あちこち寄り道をしながら進んでいく提示部に対し、その風が一転、春の嵐を思わせるように一直線に進んでいく展開部という構成は、同じへ長調のヴァイオリン・ソナタ《春》や交響曲第6番《田園》といった名曲を書いてきたベートーヴェンの集大成でもある。

**第2楽章 アレグレット・スケルツァンド** 緩徐楽章は置かれず、第2楽章はスケルツァンド、第3楽章はメヌエットとされている。この楽章では、当時開発途中だったクロノメーター（メトロノーム）の音を模倣したという「伝説」が有名だが、現在では真偽のほどは残念ながら不明。

**第3楽章 テンポ・ディ・メヌエット** 交響曲第1番の第3楽章も「メヌエット」と題されているが、実質的にはほとんどスケルツァンドであったことを考えると、「メヌエット」として作曲されているのは、9曲の交響曲の中ではこの作品だけ、ということになる（積極的な音楽ではあるが）。

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

**第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ** オクターヴ間隔でチューニングされた2台一對のティンパニは、それ以前の交響曲でも前例がない（この用法の妙は、続く交響曲第9番第2楽章で開花する）。ティンパニがファゴットとユニゾンでオクターヴ跳躍する箇所は、作曲家の天才的なひらめきとユーモアのセンスを証明して余すところがない。ハ音に解決しようとするところで半音上の嬰ハ音を鳴らし、コーダを提示部の2倍以上に拡大。作曲家の尽きることなき実験精神の現れであろう。

作曲年代：1812年

初演：1814年2月27日 ウィーン レドゥーテンザール 作曲者指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

## ワグナー：歌劇『さまよえるオランダ人』序曲

キャリア初期のリヒャルト・ワグナー（1813～83）は、自らの作風を確立させるため、同時代のオペラの作曲様式を学び、敢えて意識的に取り入れようと努力している。『妖精』（1834年）ではドイツ・ロマン派オペラ、『恋愛禁制』（1836年）ではイタリアのオペラ・ブッフア、『リエントツィ』（1840年）ではフランスのグランド・オペラをその模範とした。これらを踏まえた上で、『さまよえるオランダ人』以降、ワグナーは、ドラマの流れを重視し、すでに廃される方向に進んでいたレチタティーヴォとアリアの区別をなくしつつ、声楽的な聴きどころを随所にちりばめるようになる。

ワグナーは、1843年にドレスデンで初演された『さまよえるオランダ人』の音楽を、実際に嵐で荒れ狂う中を進む船に乗った折に着想を得た、と自伝に記している。船乗りの間で語り継がれてきた伝説をもとに書かれたハインリヒ・ハイネ（1797～1856）の作品に基づく形で、ワグナーみずからが台本を手がけた。世間に受け容れてもらえない、惨めな境遇に陥っているオランダ人に、自身の不遇を重ね合わせたようにも見える。

呪いをかけられた幽霊船の船長、オランダ人は、7年に一度だけその船から下りることを許されているが、その間に、みずからへまことのを捧げる女性を見つけねば、その呪いは解けない。序曲冒頭のホルンとファゴットによる斉奏が、この呪いを暗示する（空虚5度による開始は、ベートーヴェンの交響曲第9番の影響を受けているだろうか）。船から下りたオランダ人は自身の運命を嘆くが、そこに居合わせたノルウェーの船長ダーラントと知り合いとなり、ダーラントはオランダ人がもつ無尽蔵の財産目当てに娘を嫁がせようと約束する。

一方、ダーラントの娘ゼンタはオランダ人の伝説に魅了され、ひと

※空虚5度。長調で言うところの「ドミソ」の第3音「ミ」を欠いた和音で、長調か短調か判別できない空虚な響きとする。

り夢見がちに彼の肖像画を見つめ、オランダ人と結ばれる運命を歌う（この場面で提示される「救済の動機」は序曲でも呪いの動機と対照的に使われ、コーダにも登場することでオランダ人の救済を示す）。

すると、オランダ人が父親ダーラントに連れられて本当に現れ、2人は永遠の愛を誓う。だがゼンタに想いを寄せる獵師エリックの存在を知ったオランダ人は絶望し、もとの海へ戻ろうとするが、ゼンタはみずからを犠牲とすることで、彼の魂を救済する。

作曲年代：1840～41年

初演：1843年1月2日 ドレスデン宮廷劇場 作曲家指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハーブ、弦楽5部

## ワグナー：歌劇『ローエングリン』第1幕への前奏曲

若き日のワグナーが、ドレスデン宮廷劇場で音楽監督を務めている時代に作曲した『ローエングリン』。その後の革命騒ぎで反体制側に与したワグナーはドイツ国外に亡命せざるを得なくなり、盟友フランツ・リスト(1811～86)によるヴァイマルでの『ローエングリン』初演(1850年)に立ち会うことはおろか、その後長い間、この作品の上演に接することも叶わなかった。

『さまよえるオランダ人』以降に作曲された『タンホイザー』『ローエングリン』は、いずれもドイツ中世史を題材に取ったロマン派オペラの典型であり、ロルツィング、マルシュナーといった、当時活躍していた他の作曲家の作品と大きく異なるわけではないが、『ニーベルングの指環』以降に開拓する音楽とドラマのより緊密な一体化、いわゆる「楽劇」への萌芽はあちこちに見て取れる。

ドイツ国王ハインリヒが自国の軍勢を率いてアントヴェルペンに到着し、ハンガリーの脅威に対し、ブラバントの諸国よ団結せよと呼びかける。伯爵テルラムントは、亡きブラバント公爵の娘エルザが行方不明の弟ゴットフリートを隠し、不当にブラバント公爵の地位を得ようとしている、と訴え、国王の裁定を仰ぐ。無実を訴えるエルザに対し、国王は代わりに神前決闘に臨む騎士を立てよと命じると、エルザの夢に現れた、白鳥に乗った騎士が本当に現れる。騎士は自らの名前と素性を決めて訊ねないことを条件に、エルザの代わりに戦うことを約束。騎士は神がかり的な強さでテルラムントを打ち倒す。

第1幕冒頭の前奏曲は、まさにこの白鳥の騎士が登場する場面の音楽を先取りし、輝かしいイ長調がローエングリンその人を示す調性であることを宣言する。そして、第3幕で禁じられた騎士の名前をエルザが訊いてしまい、その場を離れる騎士が自らの名「ローエングリン」を名乗る際にも、この冒頭部分が厳かに再現されている。

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

Concert Programs

Topics

from TMSO

作曲年代：1846～48年

初演：1850年8月28日 ヴァイマル宮廷劇場 フランツ・リスト指揮

楽器編成：フルート3、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、  
バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロ  
ンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、弦楽5部

## ワーグナー：楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』 第1幕への前奏曲

『さまよえるオランダ人』以降のワーグナー主要作品において、純粋に喜劇と呼ぶ作品は唯一、本作だけである。最初期の台本草稿は、『タンホイザー』の成立と期を同じくする1845年7月に完成してはいたが、実際に15～16世紀に活躍したマイスタージンガー（歌の芸術をも追究した職人）たちの事績を調べたり、亡命生活を余儀なくされたりしたため、さらなる改訂が1861年までに手がけられる。翌年には台本を書き上げ、直ちに作曲に着手するが、当時のワーグナーは貧窮のどん底にあり、なかなか筆は進まない。

1864年、バイエルン国王ルートヴィヒ2世（1845～86）がワーグナーを自国に招いたことで状況は一変。1868年6月にはミュンヘンで、ハンス・フォン・ビューロー（1830～94）の指揮によって初演された。

第1幕の前奏曲では、この作品全体を要約するかのようになり、ソナタ形式で作品の全体像が語り尽くされる。冒頭、主役である靴屋ハンス・ザックスに代表されるマイスターたちとその芸術を表す動機（ハ長調）が、ソナタ形式における提示部の第1主題とすれば、第2主題にあたるのはそのマイスターの硬直した世界観に新しい風をもたらす騎士ヴァルターと、金細工師ポグナーの娘エーファの愛を表す動機となる。中間の展開部では、このマイスターの動機が木管のおどけた調子で演奏され（変ホ長調）、書記官ベックメッサーによる妨害にもめげないふたりの愛の強さが描かれる。

再現部では、この愛の動機がマイスターの動機によって下支えされながら多声部の音楽として進行し、ふたりの愛がザックスの自己犠牲、そしてヴァルターがマイスターとしてエーファを愛することによって成就することが示される。この再現部では、かなりの部分が第3幕幕切れの音楽を踏襲しており、長大な楽劇の最初と最後を有機的に結びつけていることにも注目されよう。

作曲年代：1862～67年

初演：1868年6月21日 ミュンヘン宮廷劇場 ハンス・フォン・ビューロー指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、  
ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、  
シンバル、トライアングル、ハーブ、弦楽5部

Concert Programs  
2/26  
3/5  
3/9  
3/18  
3/19  
3/21  
3/26

Topics

from TMSO



# T 東京都交響楽団 福岡特別公演

TMSO Special Concert in Fukuoka

TMSO

福岡シンフォニーホール(アクロス福岡)

2017年3月18日(土) 15:00開演

Sat. 18 March 2017, 15:00 at Fukuoka Symphony Hall (ACROS Fukuoka)

# T 東京都交響楽団 名古屋特別公演

TMSO Special Concert in Nagoya

TMSO

愛知県芸術劇場コンサートホール

2017年3月19日(日) 14:00開演

Sun. 19 March 2017, 14:00 at Aichi Prefectural Arts Theater

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

ピアノ ● ニコライ・ルガンスキー Nikolai LUGANSKY, Piano

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

## ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 二短調 op.15 (47分)

Brahms: Piano Concerto No.1 in D minor, op.15

I Maestoso

II Adagio

III Rondo. Allegro non troppo

休憩 / Intermission (20分)

## ブラームス：交響曲第4番 ホ短調 op.98 (42分)

Brahms: Symphony No.4 in E minor, op.98

I Allegro non troppo

II Andante moderato

III Allegro giocoso

IV Allegro energico e passionato

曲目解説(本文P.28~31をご覧ください。)

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

株式会社TVQ九州放送 (18日)

公益財団法人アクロス福岡 (18日)

メーテレ (19日)

協力：クラシック名古屋 (19日)

公益財団法人名古屋フィルハーモニー交響楽団 (19日)



お願いー演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。  
音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

A  
Series

## 第827回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.827 A Series

東京文化会館

2017年3月21日(火) 19:00開演

Tue. 21 March 2017, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

ピアノ ● ニコライ・ルガンスキー Nikolai LUGANSKY, Piano

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

## ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 二短調 op.15 (47分)

Brahms: Piano Concerto No.1 in D minor, op.15

- I Maestoso
- II Adagio
- III Rondo. Allegro non troppo

ソリストが変更になりました  
(2017.3/15up)  
詳しくは【[こちら](#)】  
(WEBページが開きます)

休憩 / Intermission (20分)

## ブラームス：交響曲第4番 ホ短調 op.98 (42分)

Brahms: Symphony No.4 in E minor, op.98

- I Allegro non troppo
- II Andante moderato
- III Allegro giocoso
- IV Allegro energico e passionato

曲目解説(本文P.28~31をご覧ください。)

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業)

文化庁

お願い→演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないように  
ご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。  
音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

TMSO 福岡特別公演  
TMSO Special Concert in Fukuoka

TMSO 名古屋特別公演  
TMSO Special Concert in Nagoya

Series 第827回 定期演奏会Aシリーズ  
Subscription Concert No.827 A Series

小宮 正安 KOMIYA Masayasu

## | ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 二短調 op.15

当作品の第1楽章の第1主題を、ヨハネス・ブラームス(1833～97)が生涯創作した中で最高の主題であると激賞した人物がいる。ブラームスのライバルだった(というよりも周囲からそのようなレッテルを貼られ続けた)アントン・ブルックナー(1824～96)である。

音楽史を紐解くと、早くから世間に注目された保守派のブラームスとは対照的に、革新派のブルックナーは様々な批判や誤解にさらされ続け、ようやく晩年、人々に認められていった……かのような印象を私たちは受けやすい。だが少なくとも若き日のブラームスも、ピアノ協奏曲第1番を含め、あらゆる毀誉褒貶にさらされた。何しろ現在でもこの協奏曲は、「ピアノ伴奏付きの交響曲」と評されるのだから。そうした意味で、たしかにこの協奏曲は異形であり、その点に対して、異形の交響曲を作り続けたブルックナーが心惹かれた理由も分かる。

成立の歴史からして、ブラームスのピアノ協奏曲第1番は個性的な道のりをたどっている。1854年に2台ピアノのためのソナタとして構想されたのが、そもそものきっかけ。自身ピアノの名手であった彼は、想いを寄せていたクララ・シューマン(1819～96)との共演をおそらく意図して作曲に着手したのだが、当の彼女と試奏を重ねてゆくうちに、その内容が到底ピアノ2台ではカバーできないことを悟るようになる。というわけで、早くも同年には交響曲への改作を目指してオーケストレーションを始めるものの、この作業も頓挫した。

翌1855年にピアノ協奏曲へ仕立てることを思い立った後、親友のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒム(1831～1907)やクララのアドヴァイスなどを入れながら、もともと構想していた第2楽章を全面的に書き改めるなど地道な作業を経た結果、1857年初頭に全曲をひとまず完成。その後も折に触れて細かな改訂を重ねていった末に、1859年の初演に至ることとなる。

こうした経緯があるためだろう。たしかに当協奏曲は、「ピアノ協

奏曲」の概念を大きく塗り替える(あるいは大きく踏み越える)ものとなった。何しろピアノ協奏曲といえば、古くからオーケストラをバックにピアニストの超絶技巧が繰り広げられるジャンルと相場が決まっており、この原則論はブラームスの時代においても変わらなかった。もちろん彼の尊敬する先達ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)などのピアノ協奏曲のように、独奏ピアノとオーケストラの緊密な対話や、作曲者の世界観を濃厚に宿した作品もなかったわけではないが、ブラームスはそうした、ある意味で異端的な存在であるピアノ協奏曲のあり方をさらに大胆に拡大していったのである。

結果、何が起こったか? 通常、軽快なテンポ(=アレグロ)に乗ってピアノが華やかな技を披露する第1楽章には、マエストーソ(荘厳に)という指示が一言だけ書かれた。そしてブルックナーが賛同した第1主題は、持続低音に乗って第1ヴァイオリンとチェロにより繰り広げられ、ようやくピアノが登場したかと思いきや、オーケストラ呈示部では登場しなかった第2主題をピアノが先導する、という捻破りが行われる。しかも第1主題はこれ以上ないほどの苦悩に、第2主題は果てしない憧れに満ち溢れるといった具合に、それらはベートーヴェンによって確立された交響曲のスタイルを通じてこそ表現可能となりうるような内容と長さを見え、当時の感覚からすれば、およそピアノ協奏曲の扱いうる範疇にはなかった。

初期稿から全面的な改訂が行われた第2楽章アダージョも、華やかさを開陳すべきピアノ協奏曲においてはきわめて異例の、宗教音楽のごとき瞑想的な曲想に満ちている。じっさいブラームスの直筆譜には、この楽章の冒頭5小節に、「Benedictus, qui venit in nomine Domini (誓むべきかな、神の御名によって来る者は)」というミサの典礼文の一部がラテン語で書き付けられているほど[この箇所には、恩人ロベルト・シューマン(1810～56)への追悼と、クララへの思慕が現れているとする指摘もある]。

第3楽章は、ピアノ協奏曲のフィナーレでお馴染みのロンド形式で書かれ、全曲中もっともピアノ独奏の華やかさが目立つ。だが当楽章の指示はアレグロ・ノン・トロッポ(軽快になりすぎずに)となっており、演奏が華美に走りすぎることが諷められている。さらに楽章の途中に第2ヴァイオリンから始まるフガートが出現するなど、オーケストラにもきわめつきの音楽表現が求められ、交響曲的ピアノ協奏曲という斬新さが打ち出されてゆく。

2/26
3/5
3/9
3/18
3/19
3/21
3/26

作曲年代：1854～57年(完成後も改訂が続けられた)

初演：1859年1月22日 ハノーファー 作曲家独奏  
ヨーゼフ・ヨアヒム指揮 ハノーファー宮廷管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、  
トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

## ブラームス：交響曲第4番 ホ短調 op.98

2台ピアノのためのソナタを交響曲に改訂しようとするも、その計画が頓挫し、最終的にピアノ協奏曲第1番を誕生させたブラームス。その後、彼は、徐々にオーケストラ作品における創作経験を積んでゆく。しかもこうした出来事が、ドイツにおける生活をやめ、オーストリアの都ウィーンへ活動の拠点を移すという、ブラームス自身の人生の変化の中で起きたことは見逃せない。

ウィーンに腰を落着けたブラームスは、この街の音楽文化の伝統から多くを学び取るかわら、その伝統の上に新たな創作活動を展開することを自他ともに期待され、極限のプレッシャーにさらされてゆく。結果、オーケストラ曲の究極のジャンルと見なされていた交響曲の1作目(交響曲第1番)を完成できたのは、40歳をとうに過ぎた1876年のこと。これによってようやくプレッシャーから解放されたブラームスは、矢継ぎ早に交響曲を作り上げ、1884年には交響曲第4番に着手する。

ちなみに交響曲第1番には、交響曲の発展に大きな役割を果たしたベートーヴェンの作品を指してしばしば指摘されるような「暗から明へ」という展開がはっきりと聴き取れる。だがその後のブラームスの交響曲は、そうした路線を継承するのではなく、むしろ彼にしか成し得ない独自の作風を帯びてゆくようになり、交響曲第4番はその極北の形となっている。

一聴して分かるのが、曲全体を覆う諦観や孤独感だ。そこには、ベートーヴェン流の拳を握り締めた戦いも、それに続く勝利の雄叫びもない。そもそも、交響曲第4番の基調をなすホ短調という調性が、伝統的に沈んだ気持ちや悄然とした心を象徴するものだった。

普通であれば快活に始まる第1楽章からして、アレグロ・ノン・トロツポ(軽快になりすぎずに)と指定され、冒頭にヴァイオリンによって演奏される切れ切れのメロディは、溜息やすすり泣きを想起させる。

アンダンテ・モデラート(中庸の速さで)という指定のなされた第2楽章も、寂寥感せきりょうかんを帯びたホルンで始まり、中間部と終結部には遙かな憧れを秘めたロマンティックな旋律が纏綿でんめんと奏でられるも、最後は寂寥せきばくとした曲想の中にすべてが収斂しゅうれんしてゆく。

Concert Programs  
2/26  
3/5  
3/9  
3/18  
3/19  
3/21  
3/26

Topics

from TMSO

ようやく快活さが出てくるのは、スケルツォの性格を持つ**第3楽章アレグロ・ジョコーソ**(速く快活に)。これまでブラームスの交響曲で用いられることのなかったトライアングルまで加わって賑やかになるが、楽章の演奏時間はあまりに短く、高揚した気分はあっけなく終わる。

その後続く**第4楽章**=交響曲の結論部分の主題は、ヨハン・ゼバ스티アン・バッハ(1685～1750)のカンタータ『主よ、我は汝を仰ぎ見る』BWV150の終曲「我が日々は苦しみに満てり」のメロディを基としたもの(BWV150は偽作説もあったが、近年はバッハ最初のカンタータとする説が有力)。アレグロ・エネルジコ・エ・パッションート(速く、激しく情熱的に)という指示がなされている割には、曲想が深く沈み込む箇所も少なくない。

しかも、非常にメランコリックな楽想の裏に、きわめて高度な作曲技法が注がれている点も重要だ。第1楽章第1主題は、ホ短調の音階すべてを使用したものとなっており、第2楽章には古代ギリシャの旋法の1つであるフリギア旋法が用いられている。

第3楽章はスケルツォ風ながら、スケルツォの基本リズムである3拍子ではなく2拍子となっており、さらにスケルツォの王道である三部構成にソナタ形式の要素を加えるという手の込みようだ。第4楽章では、バロック時代にしばしば用いられバッハも得意としたシャコンヌあるいはパッサカリア(低音が何度も同じ音型を繰り返す中で、他の楽器が新たなメロディを展開してゆく一種の変奏曲)が基本となっている。

進歩進化が唱えられた19世紀にあって、古の手法を大胆に用いたブラームスの姿勢は、一見すると時代遅れのように見えるかもしれない。だがブラームスとしては、古から伝わる伝統の中にこそ、進歩進化に狂奔する同時代が見落としてしまった本当の新しさがあると考えていた。

じっさい、20世紀における「現代音楽」の創始者の1人となったアルノルト・シェーンベルク(1874～1951)は、ブラームスこそが真の進歩主義者であると賞賛。交響曲第4番の初演に立ち会った若き日のリヒャルト・シュトラウス(1864～1949)も、この作品を絶賛している。

作曲年代：1884～85年

初演：1885年10月25日 マイニンゲン

作曲者指揮 マイニンゲン宮廷管弦楽団

楽器編成：フルート2(第2はピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部



# 都響スペシャル「シェイクスピア讃」

TMSO Special "A tribute to Shakespeare"

TMSO

東京オペラシティ コンサートホール

## 2017年3月26日(日) 14:00開演

Sun. 26 March 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

ソプラノ ● アマンダ・ウッドベリー Amanda WOODBURY, Soprano \*

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

### チャイコフスキー：交響的幻想曲《テンペスト》 op.18 (24分)

Tchaikovsky: The Tempest, op.18

### トマ：歌劇『ハムレット』より「私も仲間に入れてください」 (オフィーリア狂乱の場) \* (9分)

Thomas: "A vos jeux, mes amis" (Scène et Air d'Ophélie), "Hamlet" \*

休憩 / Intermission (20分)

### プロコフィエフ：バレエ組曲《ロメオとジュリエット》より (50分)

～大野和士セレクション～

Prokofiev: Selections from "Romeo and Juliet", Suite

Montagus and Capulets

Juliet, the Young Girl

Masks

Romeo and Juliet

Dance

Friar Laurence

Death of Tybalt

Romeo at Juliet's before Parting

Romeo at Juliet's Grave

モンタギュー家とキャピュレット家

少女ジュリエット

マスク

ロメオとジュリエット

ダンス

修道士ローレンス

タイボルトの死

別れの前のロメオとジュリエット

ジュリエットの墓の前のロメオ

曲目解説(本文P.33～37をご覧ください。)

歌詞対訳(本文P.38～39をご覧ください。)

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

お願いー演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。  
音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

Concert Programs

Topics

from TMSO



# 都響スペシャル「シェイクスピア讃」

TMSO

TMSO Special "A tribute to Shakespeare"

増田 良介 MASUDA Ryosuke

## チャイコフスキー：交響的幻想曲《テンペスト》 op.18

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）の交響的幻想曲《テンペスト》は1873年8月から10月にかけて作曲された。作曲のきっかけとなったのは、「力強い仲間たち（ロシア五人組）」の理論的指導者であった批評家、ウラディーミル・スターソフ（1824～1906）との会話だった。管弦楽曲の良い題材が見つからないというチャイコフスキーに対して、スターソフがニコライ・ゴゴリの『タラス・ブーリバ』、ウォルター・スコットの『アイヴアンホー』、そしてウィリアム・シェイクスピアの『テンペスト（嵐）』を提案したのだった。チャイコフスキーはその中から『テンペスト』を選んだ。

『テンペスト』は、シェイクスピアが40代後半で執筆した戯曲で、彼が単独で書いた最後の作品とされている。

あらすじはかなり複雑なものだ。プロスペローはかつてミラノの大公だったが、弟アントーニオと、その共謀者であるナポリ大公アロンゾーによってその地位を追われてしまった。魔法使いとなった彼は、精霊エアリエルや怪物キャリバンを従え、娘ミランダとともに絶海の孤島に暮らしている。あるとき、アントーニオらの船が島の沖を通りかかる。プロスペローはエアリエルに命じて嵐を起こし、彼らを難破させ、島へと漂着させる。アロンゾーの息子ファーディナンドは、ミランダと出会い、恋に落ちる。プロスペローは彼に厳しい試練を与えた後、結婚を許可する。やがてプロスペローの心境は変化し、アントーニオやアロンゾーら全員を赦し、魔法を捨てる。

チャイコフスキーは、おおむねスターソフから送られた構成案に沿って作曲を進めた。出版された楽譜には次のような説明が記されている。

「海。魔法使いプロスペローが彼の精霊エアリエルに嵐を起こすよう命じる。幸運なファーディナンドがその犠牲者である。魔法の島。ファーディナンドとミランダの愛の臆病なほとぼり。エアリエル。キャリバン。恋人たちは情熱に身を委ねる。プロスペローは魔法の力を捨てて、島を去る。海。」

曲は、ほぼ前後対称の、ゆるやかなアーチ型の構成となっている。

2/26  
3/5  
3/9  
3/18  
3/19  
3/21  
3/26

Concert Programs

Topics

from TMSO



2  
/263  
/53  
/93  
/183  
/193  
/213  
/26

静かなへ短調の主和音に導かれる最初の部分は海を表す。続いて嵐が吹き荒れる(アレグロ・ヴィヴァーチェ)が、それが収まると若い2人の愛の場面となり、チェロが優しい主題を歌う(アンダンテ・コン・モト)。次はエアリエルとキャリバンの描写である(アレグロ・アニマー托)。弦と木管が細かく動く部分はエアリエル、低弦に粗野な主題が現れてからはキャリバンである。再び愛の場面となるが(アンダンテ・ノン・タント)、今回はさらに激しく高揚する。やがて晴れやかで力強いコーダとなるが(アレグロ・リゾルト)、これはプロスペローの赦しと魔法の放棄を表す。再び海の描写となり、静かに曲が閉じられる。

作曲年代：1873年8～10月

初演：1873年12月7日(ロシア旧暦)(西暦12月19日)モスクワ  
ニコライ・ルビンシテイン指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部

## トマ：歌劇『ハムレット』より 「私も仲間に入れてください」 (オフィーリア狂乱の場)

19世紀フランス・オペラを代表する作曲家アンブロワーズ・トマ(1811～96)の作品では、「君よ知るや南の国」を含む『ミニョン』がよく知られているが、『ハムレット』はそれに次ぐ。『ハムレット』は、トマが1868年に書いた全5幕のグランド・オペラで、台本は、グノーの『ファウスト』やオッフエンバックの『ホフマン物語』なども手がけた、ジュール・バルビエ(1825～1901)およびミシェル・カレ(1821～72)のコンビが担当した。

シェイクスピアの戯曲『ハムレット』のあらすじは次のようなものだ。デンマークの王子ハムレットは、急死した父王の幽霊から、王を殺したのは、現在王位にある叔父クローディアスだと告げられる。ハムレットは、それを確認し、復讐するために、狂人を装う。ハムレットの恋人オフィーリアは、ハムレットが急につれなくなり、さらにはハムレットが誤って彼女の父ポローニウスを殺したことから、正気を失って溺死する。最後にハムレットはクローディアスを殺すが、自らも倒れる。

なお、トマのオペラは、最後にハムレットがクローディアスを殺してデンマーク王となるハッピーエンドに変更されている。この大胆な変更については当時から批判もあったが、オペラそのものは成功を収めた。

「私も仲間に入れてください」は、「オフィーリア狂乱の場」としてもよく知られている。19世紀前半、イタリアやフランスのオペラでは、

歌手の超絶技巧を披露するために、登場人物(主にソプラノ)が正気を失って幻覚を見たり、あらぬことを口走ったりする場面がしばしば作られた。ドニゼッティの『ランメルモールのルチア』(1835年)やベッリーニの『夢遊病の女』(1831年)などが有名だが、《ハムレット》の狂乱の場もしばしば歌われる。

場面は木々に囲まれ、美しい湖の見える場所。朝の喜ばしい光に満ちている。農夫たちが祭りの踊りを踊っている。そこへオフィーリアが入って来る。長い白いガウンを来て、髪を花々とつる草で飾った彼女を見て、農夫たちはいぶかしがる。ここから狂乱の場が始まる。

全体はほぼ5つの部分に分けられる。曲が長大なため、演奏の際に一部が省略されることが多い。本日の省略予定は以下の( )の通り。

アンダンテ「皆さんのお楽しみに、どうぞ皆さん、私も加えてください」 レシタティーフ。オペラの上演では、序奏の部分に「この美しく若い娘は誰だろう」という農夫たちの合唱が入る。

アンダンテ・ソステヌート「甘い誓いに結ばれたの」 弦楽四重奏の甘美な響きに伴われて、ハムレットへの愛が歌われる。(本日はこの「アンダンテ・ソステヌート」の部分を省略)

アレグレット、ワルツの動きで「私の花を分けてあげましょう！」  
突然、曲想が変わって明るいワルツとなる。

バラード／アンダンティーノ・コン・モト「さあ、私の歌を聴いて！」  
もの悲しい旋律のバラード。内容は、水の精によって湖に引き込まれて死んだ花嫁を歌うもので、オフィーリア自身の死が暗示されている。(本日は「バラード」後半の同じメロディの繰り返し部分を省略)

コーダ／アレグロ・モデラート「ああ！ いとしの夫」 ハムレットへの愛と絶望を歌う。

なお、バラードの部分には、スウェーデン民謡《ネッケンのポルスカ》の旋律が使われている。この部分は当初、オフィーリアと女声合唱の対話だったが、初演でオフィーリアを歌ったスウェーデンの高名なソプラノ歌手、クリスティーヌ(またはクリスティーナ)・ニルソン(1843～1921)の提案でこの旋律に差し替えられた。ネッケンとは北欧に伝わる水の精(男性)で、美しい歌によって女性や子供を水に引き込み、溺れさせる存在である。

作曲年代：1859～68年

初演：1868年3月9日 バリ・オペラ座  
ジョルジュ＝フランソワ・エンル指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2(第2はイングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、トライアングル、タンブリン、弦楽5部、独唱ソプラノ

## プロコフィエフ：バレエ組曲《ロメオとジュリエット》より ～大野和士セレクション～

『ロメオとジュリエット』はシェイクスピアのみならず、歴史上もとても有名な恋愛の物語だろう。当然、これを題材とした音楽作品も多い。セルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)のバレエはその中でも有名なもののひとつで、世界中のバレエ団の最も重要なレパートリーとなっている。しかし、この作品の運命は最初から順風満帆だったわけではない。

プロコフィエフが《ロメオとジュリエット》に着手したのは1934年末だった。翌年5月に台本ができあがると作曲は一気に進み、9月初頭には全曲のピアノ版が完成する。ところが、リハーサルを重ねるうちに、「音楽が複雑すぎて踊れない」と踊り手から文句が出たり、2人とも死なないハッピーエンドの台本(「死人は踊れないから」というのが理由だったという)が物議を醸したりとトラブルが相次ぎ、ついにボリショイ劇場との契約は破棄され、上演の予定は白紙になってしまう。結局、バレエ全曲の初演は1938年12月30日、しかもソ連ではなくブルノ(チェコ)の劇場で行われることになる。

本日演奏される組曲第1番と第2番は、初演の見通しが立たなかったころ、それなら何とか音楽だけでも、ということで作曲者が作ったものだ。組曲はそれぞれ7曲からなり、バレエよりも先に初演され、いずれも好評だった。なお、1944年になってプロコフィエフは、さらに6曲を選んで組曲第3番を作っているが、これは第1番、第2番と比べると演奏機会は少ない。

プロコフィエフは、バレエ音楽から組曲を作る際に、曲としての構成を良くするために、複数の曲をまとめて1曲にしたり、一部を削ったりと、程度の差はあれ、どの曲にも何らかの手を加えている。楽器の変更も多い。プロコフィエフは、「舞台上で音楽が聞こえづらい」という踊り手たちの意見に従って、不本意ながら、初演前にオーケストレーションを厚めに修正しているの、修正前の形態が残っている組曲の方が本来の意図に近いとも言われる。実際、晩年の作曲者は、バレエの方も組曲と同じようなオーケストレーションに戻す計画を持っていたらしいが、これは実現しなかった。

なお、本日は両組曲から9曲を選び、物語に沿って演奏する。こうすると、いわば、音によって『ロメオとジュリエット』の物語を描く大規模な交響詩ができあがるわけだ。

2/26

3/5

3/9

3/18

3/19

3/21

3/26

**モンタギュー家とキャピュレット家** 組曲第2番第1曲。威圧的な冒頭はバレエ第7曲「大公の宣言」、有名な舞曲の部分は第13曲「騎士たちの踊り」だ。この2曲、バレエでは間に5つの曲が挟まれているのだが、全く違和感なく接合されている。

**少女ジュリエット** 組曲第2番第2曲。バレエ第10曲。ロメオと出会う前の、澁刺とした少女ジュリエットである。

**マスク** 組曲第1番第5曲。バレエ第12曲。敵であるキャピュレット家の舞踏会に、ロメオたちが仮面を付けて潜り込む。

**ロメオとジュリエット** 組曲第1番第6曲。有名なバルコニーの場面。バレエの第19曲と第21曲を結合している。躍動的な第20曲をカットすることで、終始、陶酔的な愛の場面が続くことになった。

**ダンス** 組曲第2番第4曲。バレエ第24曲に第30曲の一部を加えている。祭りの日、町の広場で踊る人々。

**修道士ローレンス** 組曲第2番第3曲。バレエ第28曲。若い2人を助けようとする修道士ローレンスの音楽は、穏やかで優しさに満ちている。

**タイボルトの死** 組曲第1番第7曲。ロメオの友人マーキュシオとジュリエットの従兄弟タイボルトの決闘、そしてロメオとタイボルトの決闘、タイボルトの死を描く激しい音楽で、バレエの第33、35、36曲をまとめている。単独で演奏されることも多い。

**別れの前のロメオとジュリエット** 組曲第2番第5曲。バレエ第38、39、43、47曲をまとめている。タイボルトを殺してしまったロメオは、街から追放されることになる。ロメオはジュリエットに別れを告げるために、ひそかに彼女の寝室を訪れる。

**ジュリエットの墓の前のロメオ** 組曲第2番第7曲。修道士ローレンスにもらった薬によって仮死状態になったジュリエットを本当に死んだと思ったロメオは、彼女の墓の前で自ら命を絶つ。バレエ第51曲および第52曲の最初の部分だが、バレエでは、この後にジュリエットがロメオを追って死ぬ場面が続く。

作曲年代：1935年夏～1936年春

初演：第1組曲／1936年11月24日 モスクワ  
ジョルジュ・セバスチャン指揮

第2組曲／1937年4月15日 レニングラード  
作曲家指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、サクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、シロフォン、タンブリン、ハープ、ピアノ(チェレスタ持替)、弦楽5部